

巻頭感 図書館創設100年に想う

大 島 薫

現在の関西大学博物館、簡文館と呼ばれる旧図書館の書庫に始めて入庫した日のことを覚えている。今にも語り出しそうな本たちが立ち並ぶ、そこはまさに「知の森」だった。

「東洋一」と謳われた新図書館が開館されたのは、それから間もない1985年である。何もかもが目新しく、スイッチひとつで動く電動書架に驚き、書庫からレールに乗せられ運ばれていく本を見ても「ゴースト・バスターズみたい」と歓喜した。開架閲覧室のみでなく、書庫内にも閲覧室や研究個室ほか閲覧に必要な設備が整えられていた。この図書館で学問に向かう喜びを、学生の多くが感じたに違いない。けれども「知の森」は深く、未熟な入庫者は迷子になることもしばしばだった。でも、そんな時、図書館職員の方々が助けて下さった。本の探し方や、逐次刊行物を含む図書の購入、他大学が所蔵する図書を閲覧するために必要な紹介状の作成など丁寧に対応して下さいました。学生数の多い私立大学ではありがたいが、学科単位で管理する専門図書室がなく、レポート作成ほか調べものは図書館で行うのが常だった。職員の方々が親切にして下さったことが、どれほど有難かったか。昨日のこのように思い起こされる。

あれから20年。蔵書検索システム「KOALA」が整備され、ホームページ上で電子展示が開始されるなど、図書館を利用する風景は大きく変わった。けれども、そこに学び・遊ぶ学生を育てる、その役割は旧図書館時代からも変わることがない。そして今日も「知の森」に迷い込む学生たちがいる。関西大学の図書館がこれからも、学生教育の一翼を担った「知の森」であることを、さまざまな感謝も込めつつ願いたい。

(おおしま かおる 文学部助教授)